東日本大震災の広汎で多様な被害
――自由回答式質問による分析――

間々田　孝夫

はじめに

未曾有の大災害であった東日本大震災の研究の一環として、われわれは仙台市で大量標本による質問紙調査を行った[1)]。

一見すると、この手法は対象と方法のミスマッチのように思えるかもしれない。なぜなら、東日本大震災の被害は東日本太平洋岸の巨大津波による莫大な死傷者とインフラの破壊、福島第一原子力発電所の事故と放射能汚染という二つの問題に集約されているのに、大量標本調査の手法は被害の集中した地域に適用することが事実上不可能であり（対象者がサンプリングできない）、かといって東北の広い地域に適用すると、深刻な被害に焦点があたっていないピントのぼけたものになると思われるからである。

しかし、われわれはそう考えなかった。集中的で深刻な被害を重点的に調査することはもちろん非常に重要で、そのためには詳細な聞き取り調査や観察調査が不可欠であろうが、被害はそれだけにとどまらない。集中的で深刻な被害と並行して、幅広く多様な被害にも目を向けなければ、震災被害の全体像をとらえたことにはならないのではないか。そのためには大量標本調査が適している。…そういう思いでこの調査を実施したのである。

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）の「東日本大震災・復興支援関連研究」の研究費をいただいて実施したこの調査は、主要部分は選択肢式の質問紙調査である。プリコードされた調査項目の分析については、すでに他のメンバーが研究を進めている。それに対して筆者は、本論で自由回答式質問（問13）への回答について分析してみることとしたい。

このような質問を設けたのは、選択肢式の質問ではとらえきれないさまざまな体験がなされていると考えたからである。質問文、選択肢は、われわれが東京にいて仙台市民の被害を想像して作ったものであるが、異常で強烈な体験であっただけに、想像できないようなさまざまな事態が発生していた可能性が大きい。その部分を拾い上げるために、自由回答の質問を設けたのである。この質問の質問文は次の通りである。

「震災に関して、ニュースで十分報道されなかったような被害や、被災地の出来事などがありましたら、いわゆる「風評被害」も含めて、自由にお書き下さい。」

この質問は、今考えると少々論点が錯綜しており、記入すべき内容は、ニュースで取り上げられたかどうか、被害か出来事か、実際の被害か風評による被害か、などいくつかの可能性があり、さまざまなタイプの回答がありうるものだった。しかし、逆にそのことが震災に関して考えたことを何でも書いてもらえる質問とし、震災の影響を強く被った仙台市民に、心に溜めていたものをはき出してもらうことを可能にしたようだ。

そのためか、通常回答率の低い自由回答欄にもかかわらず、回収総サンプル数1532のうち、502サンプル（32.8%）がこの質問に回答してくれた。

この回答はEXCELのデータに写されたが、その分析にあたっては次のようなステップをふんだ。

1．回答を一通り読み、分析の軸となる主要な論点を抽出する。
2．回答を詳細に読み、１の主要な論点に触れているかどうかでコード化していく。
3．各コードに該当するケースを取り出し、コード化が妥当であるかどうかを点検するとともにさらに細かくコード化する。
4．さらにその中で重要あるいは代表的と思われる回答をチェックしていく。

２のコード化の作業において取り上げた論点は次のようなものである。ここで各項目の最後に示した数値は、記述のあった件数であり、同じ調査対象者が複数の項目に該当することがあるので、合計は上記の502を超えている。

1．被害報道が偏っていたことについての疑問や意見（62）
2．マスメディアの報道の適切さについてのその他の疑問や意見（57）
3．治安の悪化とトラブルに関する記述（69）
4．政府・自治体等の救援・支援のあり方に対する批判（67）
5．原発事故と放射能汚染に関する記述（89）
6．個人的被災体験の開陳（115）
7．他者の被害、うわさ話など１～６以外の記述（108）

この中で件数が一番多いのは６と７であるが、これらは論点がさまざまであり、また個人的な体験に基づいていて大きなトピックと言い難い内容を多く含んでいる。そこでこれらの紹介はあとにして、重要な論点を示していると思われる１～５から先に論じていこう。

１　被害報道の偏り

東日本大震災の最大の被害が津波による被害であったことは言うまでもない。震災による死者16000名弱のうち、津波による溺死者は92パーセント以上を占めており[2)]、津波被害が圧倒的に大きな意味をもっていることを示している。津波はまた、多くの住宅を失わせ、大量の避難者や生活困難者を生んだ。

避難所生活者数は震災から１週間の時点で39万人近くにおよび、1ヵ月後で約15万人、3ヵ月後で約９万人もの多数にのぼった[3)]。現在避難所生活者は200人にも満たないが、親族・知人宅等への避難者は16000名を越えており、転居者（仮設住宅・公営住宅・民間住宅・病院含む）を含む総避難者数は、今なお32万人以上に及んでいる[4)]。

他方、直接の死者や行方不明者は少ないものの、その潜在的危険性、被害のもつ社会的意味、政策への影響において津波をしのぐほど大きく取り上げられたのが福島第一原子力発電所の事故であった。この事故は当初は東日本全体にまで被害をもたらしかねないものと見られ、恐怖と不安をもたらすとともに、発電所近くで大量の住民に避難を強いることとなった。福島県では、事故当初の総避難者数が10万人を越え[5)]、その後続々と避難者が増加し、現在県内で10万人弱[6)]、県外で約５万8000人が避難している[7)]。

これらの被害があまりにも激烈であるために、地震がもたらした被害の報道はこの二つに圧倒的に集中している。極めて大きな震災であっただけに、その被害は多岐に亘るはずであるが、マスメディアの報道はほかの被害にはなかなか手が回らなかったというのが実態であった。そのため、被災地以外の人々の関心も、ボランティアや救援活動の向かう先も、そして研究者の関心も、津波と原発に集中してしまった。

それに対して、今回の調査では予想外に多くの回答者から、被害報道の偏りを指摘する声が寄せ

られたのであった。代表的なものいくつかを紹介しよう。

「後でわかったことだが、南光台、折立、中山、岩切など相当の被害があったのに、最初報道がされなかったのでもっと早く全体像を知らせてほしかった。」
「沿岸部の津波被害がクローズアップされる中、宮城県北部の内陸部（大崎市・栗原市）の被害にかかる報道が少なかった。この地区は３年前にも栗駒地震で大被害を受けており、今回さらに被害を受けた方は多い。」
「沿岸部に目が行きがちだが、内陸部でも甚大な被害はある。自分は内陸部に住んでいるが、職場が沿岸部で、津波により浸水もしたので家庭が日常を戻しつつあっても復旧のギャップを感じたりしている。」

こういった傾向は、震災直後だけでなく、調査時点（2011 年 11 月）でも変わりがないようで、次のような記述も見られた。

「沿岸部の被害があまりにも大きくて仕方がないと思いますが、今でも内陸部の被災地の被害が報道されてなく、報道のあり方に疑問を感じる。」

以上のような、内陸部を中心とする地震のゆれによる被害にもっと注目すべき、という声は大きく、合計 23 件に及んでいる。

また、山間部や内陸部というよりは、仙台市全般の被害についてもうすこしきちんと報道すべきだという、次のような指摘が 15 件見られた。

「仙台市の沿岸部以外もそれなりに家屋の被害があったが、あまり報道で目にすることがなかった。」
「限定された地域が報道されており、より広い地域まで報道されるべき。」

さらに、同じ津波の被害でも、大きな町はよく紹介されたが、小さな町はあまり紹介されなかったという指摘があり、考えさせられる。

「同じように被災の激しかった沿岸部でも、石巻・気仙沼と大きな町はよくとりあげられていたが、多賀城・塩釜・松島・東松島などあまりとりあげられなかった様に思う。そのためかボランティアの出入りに大きな差が生じた（テレビに映るところにはボランティアや芸能人がよく来るが、そのほかはあまり来ないなど）と思う。」
「大きい町は毎日ニュース（新聞・テレビ）で見るが、小さい漁村のニュースが入らないのが残念です。ニュースが入ればボランティアの方々も早く行くことが出来たのでは。」

この種の、同じ津波被害でも報道に偏りがあるという指摘は 8 件見られた。

そのほか、ビルやマンションからの落下物による死傷者の報道がなかった、地盤沈下や道路陥没の報道が少なかった、企業被害が取り上げられなかった、といった指摘も各 1 件見られた。さらに、東日本大震災の翌日（2011 年 3 月 12 日）発生した長野県北部地震の報道が乏しかったという指摘も 1 件あった。

これらの記述から読み取れることは、報道の重点の置き方と、生活実感や噂話のレベルでのインパクトの強さには一定のズレがあったこと、それゆえ、当時の報道のあり方については、改めて検討してみる必要がありそうだ、ということである。マスメディアの報道による情報は行政、支援団体、研究者など広汎な人々にその材料を与えたのであるから、これらの関係者もまた、震災を取り扱う際のバランスについて、再考の余地があるということになる。研究者としてのわれわれからすれば、震災の被害というものを、果たしてどこまで幅広く、冷静に見つめた上で研究対象を決めているかという点で、一定の反省を迫られる調査結果で

あったと言えよう。

もちろん、津波の被害は莫大であり、それを中心トピックにすることに対する異論はありえないであろう。また、原発事故が、影響の及ぶ範囲や政治、経済、文化に及ぼす影響の大きさからいって、それ以上に大きく取り上げられていることについても特に議論は必要でないであろう。しかし、問題はそれ以外の被害にどれだけ目を向けるかということである。広汎で多様な被害を何となく無視して主要な二論点に集中するのか、それらも重要度に応じて積極的に取り上げるのか、それが問題なのである。

2　マスメディア報道の適切さ

調査結果（問 13）には、以上のような被害報道の場所、種別による偏り以外にも、マスメディアの震災の取り上げ方についてさまざまなコメントが寄せられた（57 件）。しかし、そこにはさまざまなものが含まれていて、被害報道の偏りほど集中した論点は見られない。

その中にあって、比較的多くの記述があったのは、特定のテーマに関する報道がなかった、あるいは不足していた、というタイプの記述であった。まず、特定の事件について次のような記述があった。

「仙台空港で、離陸しようとしていた飛行機が地震で離陸を中止し、乗客がロビーにもどる途中に津波で流されたらしい。判断ミスと悲惨さのため、報道されないらしい。」（事実関係については未確認）

「イオン利府にて 6 歳の男の子が天井内の配管（300A もあったらしい）の下敷きになって亡くなったニュースは一瞬で消えた気がしました。」

また、避難所の報道は非常に多かったが自宅にとどまった被災者の報道が乏しかった、という重要な指摘があった。

「避難所にもいけず半壊した住宅で、救援物資を待っている人々のことをもっと多くのメディアが取り上げてほしかった。」

「避難所のことが大きく報道されていたが、実際にはペットを断られて車で過ごしたり、一人暮らしの高齢者が自宅で不自由な生活をしていたのをあとで知った。」

事件や被害の報道はたくさんあったが、人々の心身の状態にまでふみこんでの報道が欠けていた、という記述も見られた（計 5 件）。

「大きな被害（目に見える）がなかったところの人々のつらさなど、置き去りにされていた気がする。」

「ニュースでは報道されない“地味”な被害は数えきれないほどある。心の傷は皆あるし。」

「被災地の子供たち（沿岸部で被害の大きかった地域）は疲れています。勉強の遅れを取り戻すのも大変なのに“復興イベント”や“尋問”に付き合わされ『私たちは元気です』とアピールするマスコミや大人たちに利用されている。」

そのほか、次のような身につまされる指摘もある。

「観光業全般に仕事がなくなり、収入がゼロになった。…行政支援はまったくなくて困った。支援金・義捐金も一部損壊にはまるきりない、ということも報道されていない。」

他方、震災時の報道の速さについての不満も 3 件ほど述べられていた。ただこのタイプの記述については、当時非常に切実だった割には記述が少なかったという印象がある。

「ライフラインの支障についての報道等速やかにできる体制の確立が重要と感じた。」

「他県の報道が速いです。地元のニュースが遅

く感じる。」
「情報がテレビよりラジオのほうが早い。」

そして、同じく予想外に少なかったのは、報道におけるセンセーショナリズムについての指摘であった。

「報道機関の中にはかえってセンセーショナルに過大見出しなどで結果的に風評被害を助長している面が見られます。」
「被災地の現状などについてマスメディアは正しく報道していなかったように感じた。いたずらに不安をあおっていた。」
「マスコミの報道のあり方にも疑問を感じる。福島のももやりんご等全く売れないが、体に害があるわけではないので不安ばかり煽るのはどうかと思う。」

総じて、質問文の「ニュースで十分報道されなかったような被害」という言葉に反応してさまざまなことを書いてもらったものの、2の被害報道の偏りほど集中した論点は見られなかった。逆にいえば、被害報道の偏りは相対的にたいへん強く実感されたものだった、ということになるだろう。

3　治安の悪化とトラブル

東日本大震災への被災者たちの対応は、外国メディアから驚異と賞賛の的となった。これだけ悲惨な被害にあいながら、冷静で、まじめで、ひたむきに生きようとする（主に）東北地方の被災者の姿は、東北人の我慢強く粘り強い性格と結びつけられ、また民度が高く治安がよいという日本社会論の常識と結びつけられて、繰り返し報道されていた。

それらの報道を通じて、人々は大震災の修羅の場に、一筋の光を見出そうとしていたのかもしれない。

ところが、自由回答の結果を見て真っ先に目についたのは、そのような美談を否定するような、治安の悪化やトラブル、犯罪などについての記述であった[8)]。筆者自身も、そのような日本人の秩序正しい姿をそのまま受け止めていただけに、自由回答欄へのその種の記述の多さは衝撃的であった。

その中で最も多かったのは、窃盗、万引き、車上あらしなどの犯罪で、37件もの指摘があった。そのいくつかを紹介しよう。

「盗難にあったが『日本人は規律正しく』などと根拠がないマスコミ報道に憤りを感じた。風評被害の一番の加害者は無知で支持者に偏りがあるマスコミと感じている。」
「外国のメディアは震災時日本では略奪もなく立派だと言っているが、実際はいろいろなところで略奪行為や空き巣の被害がたくさんあった。津波の被害にあった親類の家でも家電製品や宝石がぬすまれてしまった」
「被災地に救援に行った人たちは、報道は美談しかいっていない！と言ってました。車や死体から貴金属等を盗んでいた人たちがたくさんいたし、ビールやドリンク、洗剤等を我先に積んでいる人が多数いたと証言していました。」
「避難所で外国人の学生らしき集団がストーブの前を占拠したり、毛布をもっていってしまったりとトラブルがあった。外国人の美談は紹介しても、外国人の起こすトラブルは報道されていないと思った。」

窃盗などが行われた場所については、津波被災地、ゆれの被害のあった市街地、避難所などさまざまであるし、その犯罪が実体験なのか、直接誰かに体験を聞いたのか、風評を述べているだけなのかという点についてもさまざまであった。しかしながら、それらを合せて37件もの指摘があったことは、この種の問題について改めて検討する必要のあることを示している。

たしかに、ほかの震災時に比べれば治安はだい

ぶよかったのかもしれない。それにしても、皆真面目で治安がよかったという美談のもとに見過ごすわけにはいかない事態が発生していた可能性を、これらの記述は示唆しているのである。

セクハラやレイプなど、女性を対象とする事件の記述が6件あったことも見逃せない。

「石巻に兄弟がいて夜に泥棒に入られそうになったり、近所では避難中に窓を割られて盗まれていたり、夜間に若い女の子が襲われたりと治安が悪かったと聞きました。」
「避難所でセクハラにあった。お年寄りの一人暮らしを助けてくれる人がいない。」（26歳女性）
「被災した方々がTVなど窃盗にあったり、実家岩手では治安が悪くなった。仙台では窃盗とレイプが増えたとタクシーの運転手さんから聞いた。」

これらの記述のうちレイプに関する記述はすべて伝聞であり、災害時のデマの類にとどまるかもしれないが、調査への回答としては書きにくいことでもあるので、実際にはもっと多数発生していたという可能性も否定できないであろう。

さらに、犯罪とは言えないが、さまざまな経済的な問題行動が見られたことも指摘されている（6件）。

「野菜等を買うため裏の方にある小さい店でいっぱいだしてあるのを買ったら、普段ではとっても売れないような少々品に問題アリが並べてあって、つい買ってしまったが食べられず自分でも失敗したと思った。店主の良心を問いたい。その店には二度と行かない。」
「近所の商店が震災後相当な値上げをして商品を売っていた。」
「買占めされて苦しんだ宮城県人が、米を買い占めているのを見て、なんていやな県民性だとおもった。」
「全国から被災地に心温まるたくさんの募金をしていただき本当にありがたく思いました。しかし、被災地をいいことに被災してないのにも関わらずお金をいろいろな方法で受け取っている方が残念なことにいっぱいいるようです。」

このほか、詐欺、手抜き工事、ぼったくりなどについても取り上げられている。

他方、被災時の差し迫った事態のもと、被災者同士で物の奪い合いが見られたことについての指摘もいくつかあった（5件）。

「海外などでは、日本人は立派、という報道がよくされたようだが、実際は避難所では食料の争奪戦のようなものがあったり、小さい子がいても年寄り・年配者が順番を無視し、我先にと食料や毛布を横取りしたりして、結構ショックでした。」
「ニュースではスーパーなどに並ぶ市民のマナーがいいと報道されていたが、ガソリンスタンドではよくトラブルがあった（横入りなど）。」
「被災者が避難貴族になっていた。…ボランティアで来たシェフが作ったスイーツを一度もらったにもかかわらず隠してもらっていない早くこっちもってきてと何度も繰り返したりしていた。ボランティアで来た人たちは同情しているので特に何もいわなかった。」

そのほか、被災者同士のトラブルを指摘する声もあったが、2件にとどまった。たとえば次のようなものである。

「（ストレスから）他人からのやつあたりをされるなど、ギスギスした人間関係がなかったわけではない。ニュースでは日本人は我慢強いとか震災婚だとか、人間関係をプラスにとらえる報道が多かったが、いいことばかりじゃない。」

以上「被災後の平穏さ」を否定するようなさまざまな証言を紹介してきたが、これ以外にも抽象的に治安の悪化に言及した記述が6件、無責任な噂を流すチェーンメールに関する記述が6件、車に釘をさすなどのいたずらについてが1件、暴力団の動きについてが1件あったことを付記しておきたい。これらを含めて、改めて被災後にどんな問題が発生していたのかを検証することも、今後は重要な研究課題となることであろう。

4　救援･支援のあり方に対する批判

東日本大震災は、甚大な被害を出しただけに、国や地方自治体、公共機関、そしてさまざまな民間支援団体が総動員体制で救援に当たった。また、震災直後の時期を過ぎた調査時点（2011年11月）でも、復旧に向けてさまざまな支援が続けられていた。

それらは、ほとんどの場合心を込めての真摯なものであったと思われるが、中には不適切な対応、行き届かないサービスが含まれていたようで、今回の調査では67件もの行政やボランティア活動への批判的コメントが含まれていた。

その中で最も回答が多く（16件、ただし避難所に関するものを除く）、おそらく今回の震災支援の一つの問題点を示していると思われるのが、支援サービス、支援物資、義援金などについての不公平感である。いくつかのコメントを紹介しよう。

「避難所暮らしの人々には食料品とか配られたが、自宅にいる人々には何もなく大変だった。寒いところ何時間も並んで、少量の食料品購入。避難所にいる人々がうらやましかった。」

「自宅の1階は津波で住めなくて仕方なく2階に住んでいるお宅の方々は、支援物資などは本当に困っている。初期の頃はほとんどこないんだよと言っていました。」

「知人の話ですが、家族でマンションに住んでおり、建物共有部分や自分の部屋には被害がなかったそうです。けれどそのマンションは半壊の認定をされており、義援金？をいただいたり、税金の免除を受けていました。金額も大きく、臨時収入のように喜んでいる様子を見て、不公平だなと感じてしまいます。」

「義援金の行き先の不公平感が職場で話題になりました。亡くなられた方の世帯へ500万円程度に対し、給湯器が倒れただけで200万円とか電子レンジが落ちて壊れただけで数十万円とか。」

メディア報道では避難所に送られる支援物資が盛んに報じられたものだが、それ以外の場所、とりわけ自宅にとどまった被災者への支援物資供給にはさまざまな問題があったようだ。また、義援金については、さまざまな矛盾や不公平が見られたようだ。

矛盾や不公平は、避難所への避難についても記されている（7件）。

「一人暮らしが長く、また賃貸マンションに住み、普段から近所づきあいもしていなかったので、町内会費、区民税等々納めているが、避難所に入れなかった。ライフラインが安定してから食料品や水の配給などがあったことを知った。行政からも町内からもそういう類の案内もなく、情報が全く得られなかった。」

「仙台市内で津波被害にあっていない人たちが、避難先の小学校で何もせず上げ膳据え膳で食事をしているという話を聞いています。わずか数キロしか離れていないにも関わらず、被害状況が極端です。」

その後の復旧は急ピッチで進められ、仮設住宅建設、生活基盤の復旧工事などが行われたが、その段階についてのコメントもいくつかあった（4件）。

「仮設住宅とみなし仮設住宅では、支援に大きく差がある。もっとみなし仮設にも光をと切に思う。」
「生活支援については復旧のあり方（漁業、農業、原発）に問題点が多くみられ、報道機関を十分活用し、被災地の状況等を周知する（災害を受けた方）ことが大切と思う。」

また、被災時には生活弱者にシワ寄せがくるものであるが、次のような深刻な経験も語られた(5件)。これらの体験談は、災害時にどのような支援体制をとるべきかについて、それぞれの福祉領域に大きな問題を投げかけるものといえよう。

「福祉施設などの福祉避難所に避難してきた高齢者が、市の措置により入居してきたが、その多くがたらいまわしとなっている悲惨な現状があり制度としての不備を強く感じた。」
「障害児とかかわる仕事をしています。保護者の方から伺った話ですが、障害のある子供がいて支援物資がもらえない（並ぶことが出来ない、待つことが出来ない）ことがあったそうです。全ての人が大変な時期でしたが障害のある人や家族にとってとてもつらい出来事だなと思いました。」
「介護の現場では次々に高齢者が連れてこられた。預ければ安心と思っているのだろうが、同じ被災地なので電気・食料が全て足りないため自宅にいるより過酷な状況で過ごされた。一度も利用したことのない方は何より心細い思いをしていた。」
「呼吸器を使用していますが、停電により、機械の使用が困難でした。ガソリンも「2000円分しか売れない」と言われました（2000円では一日電力取れないです)。命がかかっているので、救命についてもっと支援があれば…と思いました。」

このほか、県、市レベルで（11件）や国のレベルで（10件)、一般的な行政の不適切を指摘する声があったが、それらは抽象的な指摘にとどまるものが多かったので、2件引用するにとどめよう。

「地震災害については市内全般の状況の報道がほとんどない。市政だより以外の方法もあって良いように思う。また、震災後の各種手続き等の細かな情報が少なすぎる。県、仙台市の行政にはこれから頼る考えが起きなくなる。」
「自営業者の工場・事務所などへの援助が何も無い。」

行政や公共機関と比べると、ボランティアによる支援活動の不適切さについては、圧倒的に記述が少なかった。とはいえ、ボランティア活動における問題を指摘した記述も3件見られたので、最後にそれを紹介することにしよう。

「ボランティアで集まった人々や研究のために来た人が被災者に事情を聴く際に、被災者に与えうる心理的・精神的ケアが欠けていたのではないか？」
「他の地方からきたボランティアの人が被災地の写真をとりまくっていること、ブログに載せていることに違和感があった。」
「ボランティアによる泥棒」

ボランティア活動は、もちろん原則として善意に基づくものであり、多少のミスや不行き届きがあったとしても被災者は好意的に受け止めるものであろう。しかし、被災者から見て引っかかるのは、ボランティアの中にある種の好奇心が存在し、それが支援の動機に混じりこんでいると感じた場合であろう。前二者は、そのような印象を記したもののように思われる。

5　原発事故と放射能汚染をめぐって

今回の調査は、基本的に仙台市の震災被害について尋ねたものであったから、自由回答式の質問に対しても、主に市内の被害に関するものが多いものと想定していた。しかしふたを開けてみると、福島第一原発に近いせいか、原発事故関連の記述は予想外に多く、さまざまな内容を含めると89件にもおよんだ。

その中で最も多くの記述が寄せられたトピックは原発事故や放射能汚染についての報道内容への不信であり（36件）、次のように、不信の対象は、東京電力、政府、自治体、マスメディア、専門家など多岐にわたっている。

「原発事故に関しての情報開示があまりにも不透明。人命軽視も甚だしく、政府の人命よりも経済・企業優先の姿勢が情報の信頼性を大きく損ねている。日常生活の不安は生産者・消費者、共に測り知れない。今のような政府の対応が続くのであれば日本の将来はあまりにも暗い。」
「政府・東京電力・県の対応、報道機関に不信感を感ずる。特に政府・東京電力の報道はあまりにも国民を馬鹿にしている。」
「放射能に対してのマスコミ・評論家の言葉が信用できない。報道が不安感をあおっている。」

他方、情報の不確かさや不足を問題にするのではなく、過剰な報道がいたずらに不安を煽っているといった趣旨の発言も3件見られ、さまざまな見方がありうることを示している。

「放射能汚染に関して安心感を与える情報が埋もれ危機感を煽るものが優先している感がある。」
「原子力発電関係がやや過剰に反応して騒がれているように感じた。」

以上のように情報に対する不信感は相当なものであるが、筆者が一つ気づいたことは、震災当初の情報についての記述があまりなかったことである。仙台市は福島第一原発から90km程度しか離れておらず、危険性は相当のものだったはずである。しかしながら、事故当時の情報不十分な状態が不安だったという記述は思いのほか少なく、次の1件だけであった。

「震災後の買い物（スーパー）で並んでいるときに知らない人同士、種々な情報をはなしあいました（食料品、ガソリン等）。その中で、原発事故で福島から逃げていると聞いて大変不安でした。」

これは、当時仙台市の被害が大きく、原発事故にまで気が回らなかったということを示すのであろうか、あるいは調査時点ですでにかなり忘却されているということであろうか。

また、同じく原発事故当時に発生しそうな、原発に関するデマ、うわさの類も、はっきりした記述はなかった。次の記述がそれに近いであろうか。

「震災2、3日後に友人から放射能に関してのメールが届いて、雨に濡れると被曝するという内容だったが、果たして真実の内容だったのか知りたい。」

他方、比較的多くの記述があったのは、次のような原発関連の風評被害に関するものである（16件）。おそらくは、質問文に「風評被害」という言葉があったためであろう。

「私はスーパーに勤務しています。放射能にたいする意見が多く、福島産というだけでクレームをもらう。とくに仙台市内はひどい。」
「原発は福島県が悪いわけでないのに福島県民ってだけで軽蔑する人がいた。」
「同じ国民、東北に居住するものとして福島第一原発の放射能被曝に関する『風評被害』には

非常に怒りを感じます。三陸の被災松と京都大文字山焼の問題、花火の問題など。“がんばれ東北”、“絆”というのであれば、もう少し被災者・被災地に寄り添った言動が出来ないものか。やみくもに『じっぱひとからげ』の拒否ではなく。」

なお、情報に対する不満や異論は数多かったが、原発事故や放射能汚染への対策に関する意見は少数であった（5件）。詳細な記述もなく、次のような意見にとどまっている。

「放射能に対する的確な対応があまりにお粗末すぎ。原子力を扱える国民かどうかもう一度原点に立つ必要がある。」
「宮城県は福島と近いのに、放射能の話題は関東が特に多く、仙南地域でも放射能が高い地域があるのに県は何の対策も取っていないように感じる。」

6　被災体験

これまで例に示してきた記述は、おおむね共通体験的なものであり、社会現象として取り上げやすいものであった。それに対して、より個人的な体験や現状についての記述も多く見られ、それを数えると115件におよんだ。

その中で、震災直後の生活状況について記したものが過半数を越え、被災当時の生活を生々しく伝えている。それらを細かく紹介するときりがないが、その中で、特に印象深いものをいくつか紹介しておこう。いずれも首都圏で大きな被害もなくて済んだ者からすれば、想像に絶する体験である。

「小さな地域だったため、避難していることさえ知れず、２・３日は食料さえ届かず、国との通信手段さえなく、絶望と不安の中にいた。」
「地域内の出来事も入ってこなく、心細く夜になるのがこわい日が続き、電池がなくなりくらやみのなかでソファーに座った状態で余震が来るたびドアをあけて外に出ていました。」
「津波のニュースがわかりにくく、屋根の上で一晩過ごしました。」
「家の中で靴を履いたまま一週間過ごした。」
「都市部では1ヶ月たってもガスが復旧せず、シャワーなどが大変だった。」
「仕事で葬儀関係をしています。３月11日は被害にあわれた方がたくさんいました。が、地震の前に亡くなって会館にいらしたご遺族もおりました。その方々の火葬が震災で亡くなった方よりも後に火葬されたこともありました。あの時の仙台は大変でしたので仕方なかったですが、ドライアイスが欠品していて…かわいそうに思うことが多々ありました。」
「身内を６名を亡くしています。（津波ほか）記入すると当時が思い出され辛くなるのであえて記入したくありません。」

以上は外面的な経験を示しているが、精神的な経験に触れた記述も、少しではあるが存在した（5件）。次のようなものである。

「メンタル的に不安定になったり、ストレスで鬱になったり、あまりよく寝れない（不眠症）になった人がたくさんいた。」
「あまりよく覚えていない。ただ被害がさほどなかった私としては、精神的に別の意味で追いつめられた気がする。」

この種の経験は長引き、また時間が経ってから出てくることもあるらしく、記述のある５件のうち３件は、現在の不調を訴えている。たとえば次のようなものだ。

「70歳以上になり、引越しし、２年後の不安と孤独感がとても強く、一時的な不安が今頃になって表れてきている方々が多いと感じていま

す。うつ状態（ドクターから言われている）。」
「ことばや文章に表せるくらいなら楽です。私たちより大変な人がたくさんいるという思いは十分あります。でも、わが家はわが家なりに大変です。今頃になり「心」が病んでいます。」

多くが震災直後の経験を語っているのに対して、震災後しばらく経ってから現在に至るまでの経験を語っている人も少なくなかった。その中には上記のように精神的状態についての記述もあったが、その多くは被災後の復旧や生活の再建に関わるものであった（16 件）。

「地面上のがれきを撤去しても、農作業を再開するには土を掘り起こして地中のがれきを取り除かなくてはならない。」
「お墓の被害に多額の修繕費がかかっています。」
「私は石巻市の中でももっとも被害の少ない地域（蛇田）の出身ですが、商業施設がたくさんあったり仮設住宅もたくさん建っている都合上人口が急激に増加し道路の渋滞がすごいです。仕方ないこととはいえ元から住んでいる人にとっては少々迷惑で長期の問題になりそうです。」

このような復旧過程での問題点は、おそらく山のようにたくさんあるのだろうが、震災の体験を聞く問 13 の質問では、それほど多くの回答が得られなかった。この種の内容は、本来別の自由回答式質問で尋ねるべきであろう。

最後に、ほとんどがつらい経験や不満足な状況について記された中にあって、心温まる、あるいは感動的な経験が 3 件記されていたので、それを紹介しよう。

「全国からの救急車や消防車のサイレンを鳴らして、救助のきてくれるものすごい量の列に感謝の熱い涙が流れた。鳥肌が立つほど感動した。」
「近所の人や、今まで話したことのない人にも親切にしてもらいました。給水車をまって並んでいるとき、高速道路を走っていく自衛隊やたくさんの車を見て、ほっとしました。心強く感じました。」
「震災直後、スーパーがなかなか営業しないなか、商店街の方々が積極的に商品を売ってくれて助けられた、焼肉屋は店先で七輪で肉を焼いて売ったり、ラーメン屋さんはストックの冷凍ギョーザを袋で売ってくれた。改めて、地元の商店街の大切さを感じた。」

7　被害の見聞と伝聞

以上が主な分析結果であるが、それらとは違って、特に分類もできないような記述も多数存在した。その中で、「特になし」とか「わかりません」といった実質的内容のないものを除くと 108 件の記述があり、それらは一口で言えば「その他のコメント」と言える。

そこに含まれていたのは、自らの被災経験ではないが自らが「見聞」した被災に関する記述、「伝聞」による被災状況の記述、風評被害についての情報や意見、震災に関する漠然とした要望・希望、感想、疑問などであった。これらの中にはとりとめのないものが多くまとめにくいが、見聞、伝聞の中には、深刻、重大な内容も含まれているのでいくつか紹介したい。

まず、見聞した事柄については次のような記述があった。

「実家（気仙沼）が津波で流されました。一人暮らしの母を仙台につれてきました。震災後、何度も気仙沼へ行き、親戚にお見舞い金や支援物資を持って行きました。仮設住宅や民間のアパートで生活している友人・知人の話を聞くことも私ができる数少ないことだと思います。ただ一見元気そうにしているけれど、みんな疲れ

ているし、仕事がなかなかうまくいかないことで、かなりいらだっています。」
「親類が石巻市で被災したが、その父親が子供たちを迎えようと、住家の家を業者や自分で修理をした直後に死亡した。心労・過労と思われる。目に見えない二次災害は多いと思う。」
「市の中心部は被害が比較的少ないと思っていたが、秋ごろから近所の一軒家が次々と解体され平地になるのを見て、被害の大きさを改めて感じた。」

また伝聞としては、次のようなものがあった。

「石巻のパチンコ店で 200 人ほど溺れ死んでいたとのこと。石巻にボランティアに行った人から聞きました。」（事実関係については未確認）
「ボランティアがたくさん来てくれるのはうれしい。けど、ボランティアには出来ない、津波で浸水して家屋の修理をやってくれる大工さんが不足している。仮設住宅では断熱材などを入れてもらえるが、家の 2 階で生活してる人は仮設にいるよりも不自由している。家の中にいても外にいるのと寒さが変わらない。大工さんがいないことには台所も使えない。料理が出来ない。」
「東松島市で公民館の一室に一人でいた高齢の女性の話、津波で流されて、外から救いを求めた 4 人を助けたのだが、翌 12 日に助けた 4 人は女性を置いて安全なところへ避難してしまった。彼女は 4 人を助けなければよかったと今思っている。置き去りにした人がいち早く仮設に入居し、自分はやっと 8 日に仮設入居が決まったのだが、あっても感謝のことばもなし。人間不信に陥っている。」

これらは、震災時、震災後のさまざまな問題状況を示しているが、それぞれ異なる観点から検討しなければならない問題なので、深くは立ち入らず、紹介するにとどめたい。

風評被害については、さまざまな記述があり、合わせると 18 件におよんだが（先に紹介した原発関係を含む）、今回の仙台市民に関する調査では、ほとんどの場合風評被害を受ける側というよりは、風評被害に対して傍観者、あるいは風評による行動をする側としての記述がなされていたのが特徴であった。仙台市は、東北ではあるが福島ではなく、原発事故と結びつけられることは少ない、ということであろうか。
たとえば、次のような記述があった。

「水素爆発による被ばく量の隠ぺいに伴い、関東・東北産の野菜、米などは購入しないようにしています。測定値が信じられません。」
「風評被害地の食品について全て安全であるとはっきり明記して販売すべきだ。」

それに対して、風評被害を受ける側に立った記述は、次の 2 件のみであった。

「東京にいる子供夫婦にいつも野菜などを送っていたが、今年は断られた。仙台は放射能量が少ないのに。風評被害と思っている。」
「福島、宮城出身というだけで良く思わない人がいる。」

「その他のコメント」については、これ以外に漠然とした要望・希望、感想、疑問が多数書かれていたが、あえて紹介する必要のあるものはほとんどないように思われる。
最後に、けがの功名というか、震災によって却って好ましい事態が発生したという珍しい見方が 1 件寄せられていたので、それを紹介して、長きにわたった個別の回答についての分析を終わりにしたい。

「知人の家のこどもは共働きでいつも家に人がいないのに、震災直後家族がそろって過ごせて楽しかったそうです。」

結　論

本論では、東日本大震災の被害に関する自由回答式質問を分析してきた。その結果、震災の被害は通常メディアを通じて語られ、それを通じて一般市民が抱く被害のイメージとは異なる、さまざまな内容を含むことがわかった。

まず、報道されていない、あるいは報道が乏しいが、深刻な被害がさまざまな地域で生じていることがわかった（1）。この点については、仙台市の被害者にとっては明らかであり、現在では市の当局にも十分把握されていることであろうが、遠く離れた首都圏や関西圏ではほとんど知られていないであろう。そのため、支援や研究において偏りが生じている可能性がある。

また、それ以外にも報道が見逃してしまった、あるいは十分伝えなかった被害の側面がいくつか存在することがわかった（2）。

震災に対して日本人は冷静に、まじめに対応したと言われているが、この点について調査ではさまざまな治安の問題やトラブルが指摘された（3）。大震災の被害は、第一次的には自然災害による被害であるが、これらの指摘は、二次的被害として人間による被害が存在したこと、また被災者の間でさまざまな利害対立が存在したことを物語っており、今後の震災研究にとって注目すべき視点を示しているように思われる。

同じく人間が関係するのは、震災後の救援・支援活動における矛盾や不公平である（4）。救援や支援における矛盾、不公平は、助かるべき人が助からず、安定して暮らせるはずの人を安定させないといった結果を生むものであり、別の意味での二次的被害を生みかねないものといえる。また、不公平さの指摘からは被災者（時には非被災者も含む）の一部に思わぬ利得を生んでいる可能性も示された。

原発事故については（5）、報道の不十分さと風評被害についてのコメントが多かったが、仙台は福島と違って風評被害の対象となることは少なく、むしろ風評被害の源になる立場に立つことが多いようであった。とはいえ、時には風評被害の対象にもなりうることもある（7）。

被災体験と被災の見聞、伝聞についてはさまざまなことが語られたが（6、7）、それらは被害と被災体験の多様性を物語っている。精神的なものまで含めると、その範囲は膨大なものであり、1～5に示したことも含め、震災の影響に関する研究テーマの可能性について、貴重な示唆を与えているように思われる。

それにもかかわらず、これまでの震災報道では、いささか集中的でステレオタイプ的に被害が語られてきたきらいがあり、このような多彩な被災体験が十分伝えられなかった。

なぜそうなったかは、難しい問題であり、それ自体研究の対象となるものであろうが、筆者は、今回の震災の特殊性にもよるのではないかと考えている。

今回の震災は、当初しばらくの間メディアや官庁の情報収集部門にも大きな被害を与え、十分な情報を集めることが不可能となった。通常なら細かいニュースや街の声まで拾うところだが、それを行うための人的資源が乏しくなり、電気や交通機関などのインフラも破壊されて十分機能しなかった。他方、外部から入った応援部隊は、あまりにも悲惨な津波被害に衝撃を受け、もっぱらその報道に集中することになった。

そしてその間に原発事故が大きなトピックとなり、報道情報の集中はさらに進んだ。そうこうするうちに一か月、二か月と過ぎ、その間きめ細かな情報はますます忘却され、津波と原発という集中的なパターンが定着した、というわけである[9]。しかし、支援と研究の時期となった現在は、このような集中は回避する方向が望ましい。

一つには、行政課題としての復興支援は、公平かつ網羅的であるべきで、特定地域、特定分野に偏ることが許されないからであり、ボランティア等による支援も、場当たり的でなく進めるためには、より小規模の課題にきめ細かく対処すること

が望まれるからである。

もう一つは、震災の社会心理的な、あるいは文化的な意味を探ろうとする時、幅広く多様な被害状況をふまえることが必要と考えられるからである。知識人や研究者が震災を語る時、その内容は津波被害と原発事故がまず対象となり、それについで自分自身の震災体験を対象としがちである[10)]。しかし、そのやり方では、東北の被災地にいながら激烈な被害を受けていない多数の人々の体験がすっぽり抜け落ちてしまう。その体験を除くことは、震災の精神的な影響について、何かバイアスのかかった見方を発生させないだろうか。

震災の体験は激烈なものから軽微なものまで、実体験的なものから情報的体験に近いものまで、長いスペクトル状の連鎖をなすものであり、そのどこか、特に中間部分を切り落としてしまうことは大いに問題である。

最後に、本論で示した自由回答式質問による分析の意義について確認したい。

通常、大量標本調査によるデータは、既存の仮説の確認となるか、既存の仮説を批判するものとなるかのどちらかである。いずれにせよ、何らかの既存の仮説が存在し、それに対する検証としての役割を果たすのであり、仮説を修正させることはあっても、ゼロから仮説を構築する働きをすることは決して多くない。大量標本調査は面白みがない、と言われるゆえんである。それに対して、今回の自由回答データは、新たな着眼点や事実認識をもたらすという意味で発見的であり、仮説構築につながるものといえる。

しかし、自由回答データが常にそのような役割を果たすかというと必ずしもそうではない。日常体験に近い内容を自由回答式で尋ねても、研究者の体験の範囲内の、あまり新味のない情報ばかりとなるケースも少なくない。今回、新味のある重要な情報が得られたのは、まさに調査が非日常的な経験を尋ねているからであり、それゆえ研究者がおよびもつかない内容だからである。

このような情報は、通常聞き取り調査や観察調査など、いわゆる質的調査によって得るものと見られている。しかし今回の震災に関しては、質的調査において、圧倒的に多くのエネルギーが津波と原発事故の二つに注がれてきたように思われる。一般的にはマイナー領域に目を向けることの多い質的調査だが、今回は被害が巨大で社会的関心も高く、研究対象がむしろメジャーな領域になった。他方で、広汎で多様な被害についての研究は、むしろマイナーでニッチの研究分野となってしまった。

結果的にニッチの分野に照準を当てるものとなったため、今回の自由回答データは、大量標本調査でありながら、質的調査に代ってさまざまな新鮮な情報をわれわれにもたらすことができたのである。

注

1）調査の概要は次の通りである。

調査主体	立教大学と東北大学の共同
研究代表者	社会学部教授　間々田孝夫
調査実施担当	社会学部准教授　村瀬洋一
研究費出所	立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）の「東日本大震災・復興支援関連研究」助成金
母集団	仙台市全域の20歳以上の男女
標本抽出法	無作為抽出法（確率比例２段抽出法、層化はしない） 選挙人名簿の人口分布に基づき仙台市内の70地点を抽出 １地点から30人の個人を抽出
調査対象者数	2100人
調査方法	学生が訪問して調査票配布（留置調査法）および回収 ただしその後に郵送で返送していただいた回答者あり
調査期間	2011年11月23～27日　ただし1月前半まで回収継続
有効回収数	1532人　回収率73.0％

2）平成23年警察白書「特集Ⅰ：東日本大震災と警察

活動」より。
http://www.npa.go.jp/hakusyo/h23/honbun/pdf/05tokushu1.pdf

3）内閣府「避難所における良好な生活環境確保に関する検討会」資料より（資料8）。
http://www.bousai.go.jp/4fukkyu_fukkou/hinanjo/h24_kentoukai/1/index.html

4）復興庁データより。http://www.reconstruction.go.jp/topics/20121212_hinansyasuutyousa.pdf（2012年12月6日現在）

5）文部科学省原子力損害賠償紛争審査会（第14回）配付資料「福島県における避難の概況」より。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kaihatu/016/ shiryo/1311103.htm

6）復興庁「復興の現状と取組」（2012年12月14日）46ページより。http://www.reconstruction.go.jp/topics/20121225_sanko03.pdf

7）福島県避難者支援課トップページ「福島県から県外への避難状況」より。http://wwwcms.pref.fukushima.jp/download/1/kengaihinanuchiwake-suii241206.pdf　（2012年12月6日現在）

8）下記の資料には、3月15日付で「停電便乗盗み相次ぐ」、3月20日付で「震災便乗盗み多発」、3月22日付で（犯罪に関する）「デマ横行不安が増幅」という記事が出ているが、原発事故の報道や、復旧情報が多くなるにつれ、これら治安に関する記事は次第に消えていったようである。河北新報社、2011、『河北新報特別縮刷版　3･11東日本大震災　1ヵ月の記録』、竹書房

9）震災から半年以上経過してのち、震災を振り返る類の出版物が多く出されたが、それらについても、この二点集中のパターンは変わらなかった。次の出版物を参考にされたい。

読売新聞社、2011、『記者は何を見たのか　3･11東日本大震災』、中央公論新社

河北新報、2011、『河北新報のいちばん長い日―震災下の地元紙』、文藝春秋

NHK取材班、2012、『あれからの日々を数えて　東日本大震災・一年の記録』、大月書店

10）筆者自身も、大震災後の生活者の変化について書いたことがあるが、やはり被災地の人々の一般的な被害情報を参考にすることはできなかった。間々田孝夫、2011、「3.11後の生活者と市場の変化」『マーケティング・リサーチャー』116号、10－15頁